



## 九条みなみそうま

(旧・九条はらまち)

「みなみそうま九条の会」会報 No.425

(旧・はらまち九条の会) 福島県南相馬市

2025(令和7)年10月 1日(水)発行



■ **みなみそうま九条の会** は、戦争放棄の憲法9条を守り、永久に「戦争をしない国・日本」であることを願い、「鈴木安蔵の出身地の九条の会」を誇りに活動する自由な市民の会です。支持政党や宗教を問わず、何の拘束もなく、匿名でもご入会ください。■結成は2005年12月7日、今年20周年に。会員は南相馬市を中心に335名。■会費は年千円。会報を季刊で発行しています。

## 本会設立20周年記念事業『私の戦争体験』を出版 12月7日に「憲法学習会」開催を予定

○今年2025年は、昭和元年から100年、アジア太平洋戦争の終結から80年、そして何より私たち「**みなみそうま九条の会**(旧・はらまち九条の会)」が設立した2005(平成17)年12月7日から数えちょうど20年を迎えます。

○そこで「設立20周年記念事業」として、20年間の会報『九条はらまち』に掲載してきた特集「私の戦争体験」52名の集録集を出版、さらに「憲法学習会」の開催(会報No.428参照)も計画しています。

○集録集はA4判で120ページ、発行日は12月7日、出版経費は会の記念事業なので会の会計から支出し、販売益金は会の会計収入とします。

○できるだけ各図書館や学校などに寄贈し、広く読んでいただけるように努めます。

「みなみそうま九条の会」設立20周年記念

### 私の戦争体験

— 80年前、南相馬市でも戦争がありました —



2025. 12. 7

みなみそうま九条の会

### ●「戦争体験」を掲載されている方々と主な体験 <敬称略> ●

1. 早坂吉彦 2. 鈴木丑太郎 3. 星 千枝 4. 相良利信 5. 佐々木孝 6. 遠藤昌弘 7. 佐藤ヒロ子
8. 松本道子 9. 菅野清二 10. 中野目利次 11. 荒功雄 12. 佐藤邦雄 13. 金井武 14. 石塚京子
15. 門馬政彦 16. 阿部信子 17. 鈴木千代子 18. 塙 満 19. 西内真介 20. 但野博貞 21. 山田 禎春
22. 八牧美喜子 23. 大槻明生 24. 高橋正彦 25. 鈴木増子 26. 大槻千鶴子 27. 布川雄幸
28. 荒木貞夫 29. (匿名) 30. (匿名) 31. 大原尚子 32. 佐藤喜代子 33. 朝倉悠三 34. 西牧敬子
35. 山崎ハル 36. 羽根田ヨシ 37. 日高美奈子 38. 志賀五三三 39. 岡 実 40. 荒重富茂
41. 八牧将勝 42. 青田勝彦 43. 菊地ミチ子 44. 吉田信雄 45. 山城雅昭 46. 青田誠之
47. 木村栄子 48. 野村静子 49. 栗村和夫 50. 諸井時男 51. 渡部幸一 52. 若松蓉子

◆80年前、1945(昭和20)年の原町空襲に遭遇したこと、満州や中国での生活、満州から引揚げの逃避行、勤労動員中のこと、広島長崎での被爆など、生死に関わる重い体験が綴られています。

○<上表>の『私の戦争体験』52名には冊子を進呈いたしますが、このうち35名がすでに鬼籍に入られております。できるだけご家族にお届けしたいと相談しています。

○販売は1冊1,000円で、原町区三島町おおうち書点(TEL0244-22-4403)でお求めください。あるいは、お知り合いの事務局員にお申し出ください。郵送の場合は+500円(切手可)です。

- これは今年2025年8月13日付『福島民報』に掲載された会員若松蓉子さんの戦争体験「戦後80年つなぐ福島から」です。
- 原町飛行場の若い特攻隊員のことや原町空襲のことなど、これからも伝えていきたい貴重な戦争体験です。



# 特攻、空襲記憶伝える

南相馬 若松 蓉子さん 89

南相馬市原町区にあった「柳屋」は、戦前は料亭、戦後は旅館として多くの人に食や癒やしを提供した。戦時中は原町飛行場の軍人を受け入れた。店を閉じた現在、建物は取り壊され、当時の面影を残すのは、庭園のマツと灯籠のみ。「教え子を戦場に送り出すわけにはいかない」。料亭の娘として生まれた南相馬市原町区の若松蓉子さん(89)は、中学校の教師として、戦争の悲惨さや平和の尊さを訴え続けてきた人生を振り返る。

死にたくない。酒をあおってそうつぶやく若い兵

士の言葉が耳に残る。中には特攻隊員もおり、祖国を守るため命を落としていった。柳屋は江戸時代に開業し、街道を行く多くの旅人をもてなした。原町飛行場が開場してからは全国から集まった軍人が訪れるようになった。訓練が休みの日は、実家に帰れない県外出身者が食事に訪れた。当時、原町国民学校(現・原町一小)に通っていた若松さんは何人かの軍人と仲良くなった。料亭に下宿し、飛行場で訓練を積んだ特攻隊員とも知り合った。その多くは沖縄の空に散った。地元も戦禍に見舞われ

柳屋の思い出が残る庭で戦時中を振り返る若松さん。教師として教え子に戦争の悲惨さを伝えてきた

た。庭に8畳ほどの防空壕を作り、「ウーウー」と空襲警報が鳴るたびに駆け込んだ。忘れもしないのは、1945(昭和20)年8月9、10の両日の原町空襲。日中は防空壕に隠れたが、艦砲射撃が来るとの情報が入り、母と幼い弟2人と共に山側の親戚宅へ逃げるようになった。午後8時ごろ、母につかまって家を出た。横目には真っ赤に染まる夏空が見え、空襲で標的にされた工場や飛行場が燃えていた。無事に親戚宅

までたどり着き、終戦を迎えたが、空自体を焼いていた。空襲で標的にされた工場や飛行場が燃えていた。無事に親戚宅までたどり着き、終戦を迎えたが、空自体を焼いていた。

るような光景は脳裏に焼き付いて離れない。

戦後、中学校教師となり、相双地方の学校で国語を教えた。教材に広島・長崎の被爆を描いた井伏鱒二の小説「黒い雨」など戦争に関わる作品を扱う際には、自身の空襲体験などを交えて詳しく教えるよう心がけた。夏休みには戦争反対を訴える新聞や雑誌の記事を読んで意見を書く宿題を出した。校内の一部の管理職から疎まれることもあったが信念を曲げず、二度と悲惨な戦争が起きないよう生徒に伝え続けた。



定年退職後の1997(平成9)年、原町市(現・南相馬市)の要請で市国際交流協会を立ち上げた。外国人が地域に溶け込めるよう日本語教育や姉妹都市との高校生交換訪問などの活動に奔走した。「戦争を生む一因には他者への無理解がある」との考えから、人種や外見で偏見を持たない社会を目指した。

柳屋で生活を共にした軍人や家族と撮った写真を見返すたびに、80年の歳月をかみしめる。「戦争を覚えていた最後の世代」と感じる。戦時中に知り合った軍人は主に16、19歳。「軍国主義の思想が、今の高校生くらいの若者を死と隣り合わせにさせる世の中にした」と目を伏せる。「戦争の本質を正しく認識し、自分で考えることが大切」と言葉に力を込める。自身が感じたこと、経験したことを次の世代につないでいく。

## 戦争の悲惨さ教え子に